谷

題字 浜名一雄

第6号　昭和51年1月15日
発行者 群馬県山岳連盟
〒371 群馬県前橋市大手町1－1－1
TEL (0272)23－1111 内線519・520
群馬県観光課内
編集者 群馬岳連編集委員会
責任者 太田忠行
印刷所 (有)高橋印刷
定価 1部50円

新春にあたって

岳連会長　浜名一雄

群馬の岳人も飛竜の年を迎えた。加盟団体はそれぞれ新たな意欲を燃やして、北に南に計画をすゝめているであろう……。

昨年はダウラギリ四Ⅳに四人の仲間が登頂して気をはいたが、谷川岳では四人の友を失うという悲しさをも味った。

「古来上毛は風に凜烈の気あり」とは高山彦九郎伝の書出しであるが、谷川岳はこれを裏書するような厳しさがあり、既に七〇二名の遭難者となり、うち六割余が県外の人であり、本県人は五二名に達しているが、比率の上で本県人が少いことは、せめてもの救いであると思う。谷川岳は我々のホームグランドとも言えるだけに、この山の岩場にアタックする人は当然多いと考えられる。而し群馬の仲間は自らこの山を知っている。規制条例のあることも制定の理由も知っていることによって行動も慎重なのであろう。こうした良識者のいることを私は喜んでいるが、それは山を愛するが故にかくありたいと願うのである。

岳連は暮に谷川岳の冬山登山に対して注意するよう通知したが、誰もが人間にとって最も大切なものは生命であるからに外ならないからである。勿論谷川岳に限らず何れの山であろうと、この願は同じである。

山は常に美の神と魔王が同居している。美の神に対しては、これを充分に味い讃美する喜びを歌いあげるべきであること勿論であるが、魔王に対しては如何に慎重に対処するか、各人の経験、体力、技術、研究、によって異るのであるから、その行動は容易でない。

私はどうやら老婆心を書きつらねたようであるが、この一年皆さんが最も実のある、最を楽しい山行をして欲しいのである。

登山の楽しさは登頂時の苦しさに正比例すると言った人があるが楽な登山などあり得ない。要は如何に安全登山をするかを、常に考えて結果として自分を豊かにして欲しいと思う。

紅葉の溪谷を歩く
第30回三重国体報告

期日　十月二六日～三一日
場所　台高山系(日出ケ岳・国見山・大杉谷・古ケ丸山・三峯山)
テーマ　たくましくあすをひらこう
参加者　監督　村上泰賢(中高)
成年　山鹿良一(富士)・内田光男(富士)・関仙治郎(中之条)
少年　土屋智明(高工)・小野勇(中高)・高橋純路(伊工)
評価内容　大台ケ原の主峰日出ケ岳から北へのびて高見山へつらなる台高山系は日本有数の多雨地帯であり、豊富な水に刻まれた大杉谷は急峻な山腹をさらにえぐって絶壁・滝・渕・吊橋・桟道とめまぐるしい変化をみせる。こういった会場にあわせて評価7項目のうち体力を最重点(25点)に、ついで歩行技術(20点)と観察研究(15点)にウエイトをおき、以下生活技術・マナー・チームワーク・服装々備(各10点)にわたって審査された。

体力といっても、山じたいの標高が低く、谷底からとりついても一・二時間で尾根あるいな頂上へ達せられることから、歩行技術とかみあわせ、状況変化に応じて敏速に対応することがポイントだったようである。(今回は連日小雨やにわか雨があって意外にむし暑かったため、耐久力で差が出たと思われる。)観察研究では昨年同様読図テストがしばしば行なわれ、二万五千の地図をコピーしたものに現在地を記入したり、渡されたスケッチに尾根、ピーク名を入れたり、事前研究の応用として大台ケ原山の標高や雨量、尾鷲市の方角をたずねたりした。

はじめとおりに計画書と記録の提出があってこれも評価された。生活技術では幕営・炊事などのほか装備ともからんで、借りた装備新しい装備でも使い方に習熟しているかどうかがみられた。また軽量テントで居住性を犠牲にしすぎたり、ナイロンが多雨地帯に合わない点などが講評で指摘されていた。

運営二年後の得点競技化をめぐす手はじめとして監督と選手の切り離しが行なわれ、監督はC・Dいずれかの少年コースを歩くが日中はほとんど別行動となった。初めての試みであるだけに引率責任もからんで、とくに少年チームに故障者が出た場合のことを懸念する声があったが、今回はこれといった支障もなく終った。コースも従来の5コースから4コースに縮少され、コースによっては前半ほとんど谷筋歩きに終始することなど、一部に不詳もあったが、溪谷歩きのすばらしさを充分に味わうことができた。

省みて　最終日の表彰式において少年チームはDコース第一位の栄誉を受けることができた。惜しくも選にもれたとはいえ、一般チームも講評においてチームワークのよさを指摘されるなど、のびのびと力いっぱいを尽すことができた。これは一つに早目に選手選考がなされ強化合宿を重ねる余裕がもてたことや9月10日の毎土曜に両チームが泊りこんでミーティングを重ねた結果かもしだされたチームワークによるもの、さらに前回あるいはそれ以前の国体経験者からのアドバイスがプラスしての結果であると考えられる。岩菅山から島甲山へ、稜道寸前のコースで行なった強化合宿は、どんな会場でも驚かない自信と人けのない秋の山のよさをたっぷり味わうことができていまだに忘れがたい。

曲がり角にきた国体ともいわれ得点競技になったときどれほどのゆとりをもって行動できるものかわからないが、笑顔で別れた全国岳人の顔が、精一杯の誠意をつくしてくれた地元の人々やこの次いつ……とふりかえった台高の山々とともにしみじみ思い出されるこのなつかしさは、国体登山のほんとうのよさとしていつまでも語り伝えてゆきたいと思う。(村上)

関東地区
岳連協議会

先輩の方々を客員として迎え、現役の者との交流、親睦をはかろうということで始った協議会であるが、今回は群馬岳連が当番県にあたり、去る十一月十五日奥多野のやまびこ荘で開かれた。なごやかな雰囲気で懇談し、翌日は晩秋の溪谷を探勝したり、鍾乳洞見物などして二日間を過した。参加者三十名。

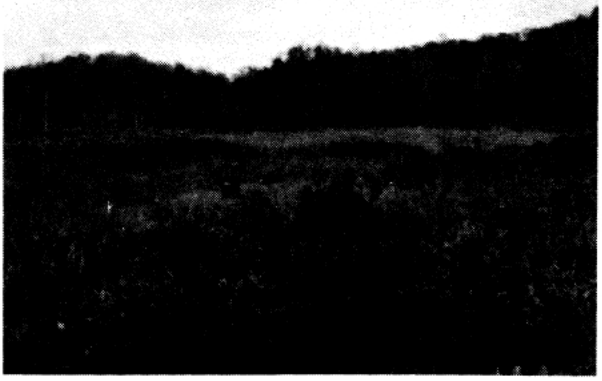
関東地区
指導員研修会

日山協では、昭和五〇年度の指導者研修会を各地区別に分け、関東地区の東京・千葉・新潟・栃木群馬を一ブロックとして九月二七八の二日間にわたり、谷川岳で行った。今回は、酒井常務理事を主任講師とし、岩登りの実技と指導法をテーマに熱心な研修が進められた。本県からは赤石指導員ほか一〇名が参加した。

岳連の行事予定

一月
二六日　冬山報告会・体協
二月
一日　氷壁講習会
八日　合同新年会
一三・一四日　指導者講習会(高体連)
三月
七日　救助隊訓練
二一～二五日　全日本登山体育大会(秋田)
二六～二九日　リーダー講習(高体連)

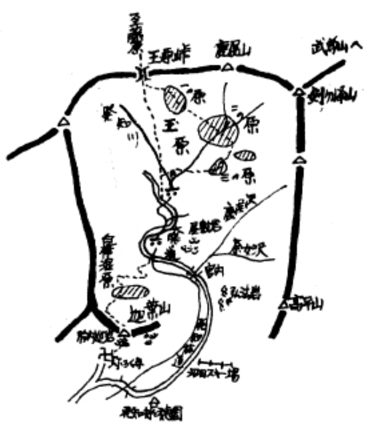
奥利根の山は、谷川岳や尾瀬で代表されるが、玉原湿原なども捨てがたい貴重な存在だと思う。
　玉原湿原などの紹介は過去、玉原、迦葉山を中心に県民登山大会を開催した事があり、参加者は既に知っている事と思う。
　玉原湿原は、霊鳥、仏法僧や日本一の大天狗面で有名な迦葉山の真裏に有り、峻峰武尊山に連なる鹿俣山の内懐ろに抱かれた湿原である。
　玉原湿原は、高層湿原、中間湿原、低層湿原の三つの要素を持っていて、尾瀬ヶ原の様な湿原では無く、長い気象の変化により日光の戦場ヶ原の様な、沼がやがて湿原(湿原末期)になりつつある。しかし尾瀬ヶ原の様な広大では無く、北から、一の原、二の原、三の原と、散在しているのが特徴である。



—かくされた山②—
玉原湿原と迦葉山

沼田山岳会

　沼田駅を下車駅前からバスで迦葉山行に乗り、終点の透門でバスを降りる。左に迦葉山登山道と別れ、発知林道を発知川に沿ってしばらく行くと、右手に営林署のスギ採穂園が見えてくる。この辺りから前方に武尊連峰の剣ヶ峰山が、独特な容貌で単調な林道に変化を与えてくれる。透門より三十分、やがて市営沼田スキー場に着く、ここの人家が最後となり、上流に進むにつれ川は狭くなり、尾根の中腹に奇妙な形をした岩が点在して居るのに目が止まる。
　これが弘法岩で、又、正面にはどっしりと大きは岩があり屋敷岩と呼ばれている。屋敷岩に向ってさらに進むと、赤軍アジトで知られた鹿俣沢出合に着く。かって車道はここが終点であったが、最近では山道では無く立派に拡張され車道としてさらに奥に続く。
　鹿俣沢を渡ると、谷は増々狭くなり、川の流れも一段と早さを増し溪谷を形成してくる。途中清流を利用したワサビ田を見ながら行くと、谷は右に大きく曲り両側の山はブナやナラの林となる。流れが道に近くなるとやがて川を渡る。ここで、玉原湿原は右に行き、迦葉山への道は左へと分かれる。
　玉原湿原へは、相変らず広い林道を右に左に、上流の発知川を渡りながら進む。川と道とはさほど高度差は無く、途中五メートル位の大膳の滝が有る程度で、変化に乏しい緩やかな登りである。
　やがて川が二俣に分かれると、道が大きく左に曲り、左俣に四メートル位いの滝が見られ、上の十二様の鳥居が目に付く、ようやく玉原湿原である。林道を右に仮設の足場を登り切ると、玉原越と湿原コースの分岐点に着く。
　湿原コースは右に発知川の源流を渡り、ブナの原生林やチシマザサ、ハイイヌツゲに囲まれた湿原を、所々に敷いて有る木道を頼りに時にはヤブこぎなどして、湿原を縦断する。
　湿原の植物は約九十種類位いと思われる。特に水芭蕉、ショジョウバカマ、コバイケイ草、リュウ金花、ツルコケモモ、ケマン草、モウセンゴケ、朝日ラン、立山リンドウ、カキツバタなど、群落となって、登山者の目を楽しませる。
　湿原の北端に有る一の原を北西に向うと、玉原越と合流、右に進むと、やがて前方が開け峠に着く。峠を下れば、平家の落人の住みついた藤原や藤原湖へと行くことが出来る。帰路は湿原の西側を通り迦葉山、弥ろく寺、透門へコースを取ることにする。



玉原 迦葉山 概念図

　玉原峠から林道までは単調な山道で、約十分で着く、途中、迦葉山コースの入口までは、前記説明したので削略する。
　迦葉山コースは、分岐点より川と平行して南下し、百メートル位い行くと沢に出る。水場はここが最後で弥ろく寺までは無いから注意されたい。沢の左岸はダム建設調査の試掘跡が有り、道はさらに緩やかに山腹を登る。やがて曲りくねった坂となる。この辺り全体は、典型的なブナ林で途中の急な坂道を、木の根を足場に登りきると平担になり林の中を西に暫く進むと、白樺湿原に出る。東西に約二百メートル、南北三十メートル位の、こじんまりとした湿原で、名前のとおり白樺の木が回りを囲んでいる。白樺湿原を過ぎると、ブナやクヌギの林となり、ササを分けながら登りきると、稜線に出る。視界が開けさらに進むと、田代の見晴台に着く。展望は良く、眼下に沼田盆地が広がり、谷川連峰や武尊山、赤城山、榛名山、又、天気の良い時は、遠く富士山やアルプス連峰を眺められる一大パノラマである。
　弥ろく寺への降り口は、御嶽山大神を祭ってある石碑の前である。急坂を慎重に下れば二十分近くで、胎内巡岩に着く。約七十メートルの岩山で、七本位いの鎖で頂上に登ることが出来る。この附近は春ともなれば、山桜やこぶしの花が咲き乱れ、参拝者やハイカーで賑わい、時折り頂上で信者が呪文を唱える姿を見る事が出来る。
　ここから弥ろく寺までは二十分たらずの下りで、寺から透門までの下りは、車道があるが、樹令何百年もの、スギの古木が生い繁る昔ながらの参道を里に向って下れば、四十分で透門に着く。

（文責　水野金太郎）

●コースタイム

◎沼田駅 ═(バス 五十分)═ 透門 ═(八十分↓ ↑六十分)═ 鹿俣沢出合 ═(五十分↓ ↑四十分)═ 迦葉山コース入口 ═(四十分↓ ↑三十分)═ 玉原湿原 ═(三十分↓ ↑十九分)═ 玉原峠 ═(九十分↓ ↑六十分)═ 藤原湖

◎迦葉山コース入口 ═(四十分↓ ↑三十分)═ 白樺湿原 ═(四十分↓ ↑三十分)═ 田代の見晴台 ═(三十分↓ ↑四十分)═ 胎内巡岩 ═(三十分↓ ↑四十分)═ 弥ろく寺 ═(四十分↓ ↑六十分)═ 透門

沼田山岳会紹介

　昭和三十年、前身である沼田スキークラブより、沼田市体育協会の発足と共に独立して、沼田山岳会となる。利根水源を始め、谷川岳南面を開拓し、特に、幕岩を中心とする各ルートをアタックした。
　現在は、谷川岳を踏台に、剣、穂高岳など、県外への活動を開始している。
　会員数、五十名(OBも含む)
　事務所、沼田市西原新町一五一二の一水野金太郎方　電話〇二七八(四)一〇五九　会長・大竹尚夫
代表・水野金太郎

大型写真パネル・風　景・撮　影
あなたの山行のネガでパネルにしませんか。
須田フォート光芸
前橋市総社町植野225 —22
TEL　0272—51—0206

<新製品紹介>
前開きダブルヤッケ
前ファースナー・両サイドポケット付
山とスキーの店
有限会社 石井
伊勢崎市中央町18番8号
TEL　0270—25—0272

カラコルム偵察隊報告

海外登山研究会

（前号よりつづく）

デイビス・ホテルに移ってからは、他の隊から色々な情報を入手する事が出来て、何かと便利であった。パキスタンでは、トレッキングと言う場合にはネパールのそれと違って、エクスペディションの部類に入り、氷河地域に入る者はリエゾン・オフィサーをつけなければならない。我々には経済的余裕がなかったのと、めんどうな手続きに煩わされたくなかったので、あくまでもツーリストとして押し通してしまった。一九七六年からは、トレッキングもそう、容易な事では無くなるだろう。

五日間天候が悪く、我々フライト予約も順延されてしまうのかと恐れていたが、PIA事務所での小林君の押しがきいたのか、一日伸びただけで乗る事が出来た。

六月二五日、空軍の輸送機に乗り込んだ時には、これで山も見ずに帰国なんて事にならずに済んでホッとした。パンジャブの上空でナンガパルバットに接したが、その勇姿に圧倒されてしまった。又機中では、京都登攀倶楽部隊と一緒だったが、隊員の中に高経大OBの浅沼氏が居るのを知り、世界もそう広いものじゃないなと感じる。

チョクトイGL（4,600m）付近からのラトックI峰（7,145m）

スカルド空港は砂漠の中にあり、滑走路だけが唯一の設備だった。街まではジープで約二〇分程かかる。我々の滞在したレストハウスは、インダス河を見下す小高い丘の上におり、JAC岩手、京都登攀倶楽部、岡山大の各隊と我々が同宿して、まるで日本の山小屋に泊り合せたような感じがした。

スカルドでの二日間、乾燥した暑さに悩まされながら、食糧や装備を調達し、ジープをチャーターした。

二七日、ジープでダッソーへと出発。我々だけが乗るものと思っていたら、ポーランド隊（ガッシャーブルムIII峰）の女子隊員一人と現地人の総勢一一人が乗り込み、鈴生りジープとあいなった。

ダッソー手前のバハーと言う部落でジープはストップ。荷物を下していると、早くもポーター達が集まって来る。ダッソーまでは約二時間の行程でポーター賃は二〇ルピーとの事、とりあえず六人雇用し荷物を分配して、その日はダッソー泊り。ここで改めてアスコーレまで行くポーターを交渉する。

一日三〇ルピーと食糧を支給する、食糧を支給出来ない場合には別に一〇ルピー加算する、と言うのがガバーメント・プライスとの事だった。この辺りではバルティ語を使っている為、英語もウルドゥ語も通じない。（我々のわずかに習い覚えたウルドゥ語など、通じようはずはなかった）比較的大きな部落には、英語の話せる者が一人か二人はいて、ポーターとの交渉はその者と行なう。最初は四〇ルピーで交渉が成立したのだが、後になって五ルピー値上げされてしまった。（ツーリストなので甘く見られてしまったらしい。）

翌朝やって来たポーターを見ると二人入れ替っていた。青々とアプリコットや桑の繁った村を後にキャラバンを開始する。プラルド河右岸につけられた道を進む。村をはずれると、荒涼とした乾燥地帯である。河のふちを行くかと思うと、大きく高巻いたり、歩きずらい砂礫の中を進んで行く。河岸段丘がいたる所に見られ、河の浸蝕の激しい事を物語っている。

茶褐色の荒涼とした風景の中に、時折りポツリポツリと緑の段丘が現われるが、そこが彼等の生活の場所であった。氷河からの豊富な水を得たプラルド河とその支流は、褐色の濁流となって流下しているが、それらの水を引いて、わずかな農作物（主として麦）や木を育てているのだ。日本のように緑豊かな自然に恵まれた民族から見れば、彼らの生活環境は想像以上に厳しいものだ。

ポーターの歩調は遅くはない、しかしチョコチョコとよく休む。我々の歩き方とはまるで違うのでイライラしてしまう。

二九日、チャポからチョンゴへと向う。途中緑地はほとんど見られなかった。プラルド河のふちに沿った砂礫地帯を進んだが、温泉の湧き出している所があった。帰路の楽しみに取っておくことにして先に進む。チョンゴに着いた時には日が暮れていた。ポーターの遅れには腹が立ちここで全員解雇して、翌日新しくポーターを雇用する事になった。

三〇日、いよいよ最後の部落アスコーレへと向う。三時間程の行程だと聞いていたので、三〇リピー支払う約束で出発した。ところが、アスコーレに着くと四〇ルピー払えどごね出した。双方がゆずらず二時間以上もめてしまった。結局アスコーレの村長が調停に入って三五ルピーで決着がついた。

（次号に続く）

（文責　奥原彦治）

谷川岳へニパーティ

冬山合宿検討会

正月山行については、昨年十一月二十一日付をもって会長から各会に慎重な計画と準備をすゝめるよう要望が出され、特に谷川岳の危険地区登山は自粛するよう示達された。遭難対策部会では、十二月一日体協会館において、冬山計画の検討会を行ったが、加盟四十二団体の中、計画書を提出した会は僅かに十三団体であった。会長の前記示達を踏え、熱心な討議が行われた。谷川岳へは**むすび、藤岡**が入山した。

今冬は、大間々、ミヤマが岩壁登攀を計画しているほか他の会は縦走形式をとっているのが注目される。以下各会の計画を紹介する。

群馬登高会・1/30～1/5・槍ヶ岳、燕東鎌尾根、10名、CL茂木貫太郎

伊勢崎山岳会・1/30～1/6・前穂高、北尾根、奥穂高、11名、CL福田清

群馬ミヤマ山岳会・1/28～1/1・剣岳小窓尾根、チンネ、早月尾根、8名、CL谷弘行

沼田山岳会・A隊・1/28～1/4・剣岳早月尾根・12名・CL笛木友二

B隊・1/30～1/6・八ヶ岳・6名、CL和南城誠人

桐生山岳会・1/29～1/9・剣岳、赤谷尾根、早月尾根、6名CL石川忍

前橋山岳会・1/31～1/5・五竜、鹿島槍、爺ヶ岳、12名、CL松田龍彦

沖電気山岳部・1/30～1/4・富士山、9名、CL高橋明夫

境町山の会・1/29～1/6・八ヶ岳、6名、CL高橋良雄

群馬むすびの会・1/1～1/3・矢場の頭、茂倉岳、5名、CL木暮寛

太田山岳会・1/31～1/4・前穂北尾根槍ヶ岳、7名、CL村岡友次

大間々山岳会・1/28～1/6・前穂高四峰正面松高、4名、CL深沢勇二郎

群馬カモシカ山岳会・A隊・1/29～1/4・八海山、8名、CL丸茂純男

B隊・1/1～1/5・上州武尊山、9名

CL鈴木正史

藤岡山岳会・1/29～1/6・谷川岳、三国峰白毛門、5名、CL四方田利男

遭対部会からは、次の要望があったので今後は各会において必ず遵守していただきたい。

(1)計画書の大きさはB5に決められているが守られていない。(2)書き方、必要最少限度のものは必ず記載されたい。(3)下山したら必ず報告せよ（西山隊長まで）(4)山域別に互いに連絡をとり、救援態勢も考えておけ。(5)昨年同様、午前午後とも六時四十五分から五分間、トランシーバーを開局し、連絡をとる。

なお、報告会は一月二十六日体協会館において行われることとなった。報告書様式も定められているので注意されたい。

検討会に出席しなかった会でも大なり小なり合宿山行を行ったことと思う。事前に遭対部会へ計画書を提出したかどうかにかかわりなく報告会には出席して謙虚に山行を反省していただきたいものである。

（文責・太田忠行）

伝統の誇り―最高を目指す
NC・UC・県生協・鉄粟の店
徳永KKスポーツ
前橋市大手町群馬大橋通り
TEL　0272(24)3032(代表)

特売　アザラシシール…¥13,000
英国製半シラフ……¥8,000
山とスキー専門・白緑グループ
ピーヨン スポーツ
高崎市檜物町54－2
TEL　0273-26-3888

登頂を終えて
ダウラギリⅣ峰
八木原圏明

私共、宮崎勉と八木原圏明の二名は東京のカモシカ同人による「ダウラギリⅣ峰」登山隊の隊員として参加いたし、昨年の十月二十日に第二次登頂隊として八木原ら六名が、翌二十一日に第三次登頂隊として宮崎ら三名が登頂、合計十一名の登頂という成果を上げて帰って参りました。出発の際には壮行会を、又昨年暮には（宮崎は帰国致してはおりませんでしたが）盛大な祝賀パーティーを催して頂き、誠にありがとうございました。

私共の今日の成功は私共十四隊員のみの力で出来たものでは決してありません。皆様方をはじめ多くの方々の御協力を頂けたからに他なりません。

六九年の海外登山研究会の発足七〇年のダウラギリⅣ峰への遠征決定、七一年の偵察、七二年の本隊、そして松井隊員の高山病死というヒマラヤ登山の初歩中の初歩的ミスによる失敗「目の前が真暗になる」という経験をしての淋しい帰国でした。

それから二年半、それらの経験や失敗を踏まえて、三度とは訪れまいと思ったベース、キャンプに入り、宮崎と二人で松井氏の冥参、そして「やろう！」と握手して誓った。「成功する事だけが彼に対する唯一の供養」だったから。

とにかくダウラギリⅣ峰は終りました。微力ではありますが、群馬岳連のためにお役に立てる事があれば少しでも、と考えております。本当にありがとうございました。

ダウラギリⅣ峰正面、C6、C7間を荷上げ中の隊員。
円内上八木原・下宮崎。

岳界通信

リーダー研修会開く

「リーダーの責任について」
講師　太田忠行（常任理事）
十月十三日　体協会館

遭難事故における（リーダーの責任）は最近とみに問題視される傾向にあり、今回研修会では幾つかの実例を取り上げ、講師の専門的な立場から法解釈と、責任の所在について大変有意義な研修会を行なうことが出来た。

参加者は、十八団体五十八名でした。尚当日5ミリから8ミリまでのロープと、各種テープの破断実験結果の強度の発表も行なわれた。参考にするとよい。

岩登り講習会

十一月九日　榛名山黒岩

田中指導委員長を始め、指導員会の講師により初心者から上級者までの人達を対象に、主としてフリークライミングの講習を行なった。参加者は十三団体四十六名で朝早くから真剣に実技を習得したが、確保の実技では思うようにきまらず苦労していたようだ。

実際にはうまくこなしているようだが、講習会だと実力が発揮出来なくなってしまうようであるし参加者が多くて実技が充分でなかった面も見られたが、指導員講師の努力で無事に終了しました。

臨時指導員会総会開く

十一月十八日　体協会館で約三〇名の指導員が集加して開かれ、規約の一部改正、会費等の値上げ・行事報告及び行事予定の検討・新指導員の紹介・等が議題となり・話し合いが行なわれた。

救助隊の訓練

十一月二十六日　幽の沢大滝

久方ぶりに天候に恵まれ、大滝の付近にて手持の用具を利用して少数の人達による、遭難者の救出訓練を実施した。

すでにワイヤーウインチなどの扱いについては充分に技術の修得がなされたので、今後の救助技術は、現場において少数の人達による手持の用具のみの活用による救助救術の修得がなされる方向に進められるとのことである。

尚通信の試験も実施されたが、地形が複雑で思うように飛ばないようであった。

第16回全日本登山体育大会のお知らせ

本年度の全日本登山体育大会は昭和五十一年三月二十一日（日）から二十五日（木）まで、秋田県駒が岳周辺をゲレンデに開かれます。各県二パーティ（一パーティ四名）で、登山行動は中三日です。

参加者は、スキー・輪かんを持参し、テント泊・雪洞泊各一泊を含みます。全国の岳人と交流出来るよい機会です。希望者は至急、県観光課内岳連事務局へ連絡のこと

ダウラⅣ報告会

長年の宿願をかけて東京カモシカ同人隊に参加しみごと登頂に成功した。県内参加者（宮崎残留）を迎へ、十二月二十日前橋市間屋町センターにおいて報告祝賀会を開催した。

会長を始め、高橋隊長夫妻などの人達も顔を見せ、多勢の参加者のもと、スライドと遠征報告を行った後、祝賀会にうつり遠征話に時のたつのも忘れる程であった。

第七回ヒンズークシュ　カラコルム会議

第七回H・K・Tが十一月八日九日・福岡市国保会館にて開催され、群馬岳連海外登山研究会からカラコルム調査隊の奥原彦治・「山田昇の両氏が参加し、チョクトイ氷河からピァフォ氷河踏査の報告をした。

新加盟団体の紹介

野山の会
所在地・県庁内造林課・代表
伏島信治会員数十名、五〇年十月加盟ミヤマ山岳会前橋山岳会の推せんで

編集後記

富士山で水と燃料と間違えた初歩的な事故が二件も発生した。容器に標識を付けるのは登山の常識であるが経験豊かなガイドが、そして良識ある大学生がそのミスを犯しているのだ。情報社会の便利すぎる生活の中で人間の感覚が失なわれていくのだろうか。山ボケだけで済まされない現実を感じる　（T）

韓国姓の日本語読みは人権侵害になり損害賠償として一円支払えという。一円は名前と同様お金の基礎だからと。権利の主張も遂にここまで来たかと思いを新たにする。一つの山行をするにも余程慎重に計画を立て実践していかないと一リーダーの責任だけでなく山岳そのものの責任をも問われることとなろう。責任は民事的責任と刑事的責任、それに社会的責任をも負わねばならないことに心すべきである。　（O）

「アイガー・サンクション」を見た。イーストウッドが吹替なしで北壁をやったという迫力が評判だが、ハンドホールドが高過ぎたり、ビバーク場面が略されたりが惜しまれる。但し墜落場面は映画的見もの。岳人としては原人的興味を引く「デルスー・ウザーラ」（黒沢明監督）を推したい。（Y）

今年度谷川岳における遭難事故で特に問題が残された事故と云えば、一の倉沢における、ブロガイドに関係した遭難事故で、すでに書類送検されているが、この問題はリーダーの責任にも関連し、意味深い教訓を残してくれた。

単純に考へれば、常識では処置しきれない要素も含まれ、結論はむずかしいが、安全に登らせるためには、カッコよさだけではすまされないようだ。　（M・K）

この六号の編集に三日間かかった。七時半頃から集まり、原稿の整理や割りつけに意見をかわす。誤字やかなづかいの訂正を含めて執筆者の原文を生かす仕事はむずかしい。六人六色で時には登山談義の花も咲くが、格調の高い新聞づくりを目指しています。願わくはこのミニコミが県下の登山界に話題を提供し波紋が拡がり、協力と批判が得られることを念じつつ……。時に十一時三〇分。　（M・K）

六号の編集も年の瀬がおしつまってやっと仕上がった。まだ校正印刷と仕事は残っているが、一段落という感じだ。割付をしていてヒマラヤ等の海外の記事を読んでいると、もう一度海外へ出てみたいという気がしてくる。　（K・T）

ヒマラヤトレッキング隊出発

十二月二十七日群馬の岳人十三名（むすび・前橋・ミヤマ）が、ヒマラヤトレッキングの旅に出発しました。同隊は「エベレスト街道」（ゴラバニ方面）を回り一月十七日に帰国予定です。

会報寄贈御礼

「岡山岳連」五号
「兵庫山岳」一〇〇号、一〇一号、一〇二号、
「愛知岳連ニュース」一六五号　一六六号
「FOMニュース」（大阪府岳連）No.五五